シリーズ 7

AG5だより

日本人学校・補習授業校を応援します！

日本人学校における高度グローバル人材育成のためのプログラム開発
――香港日本人学校の取組と連携する東京学芸大学附属大泉小学校――

AG５研究員・東京学芸大学附属大泉小学校副校長 細井 宏一

日本人学校・補習授業校を応援する「AG５」。在外教育施設を高度グローバル人材育成の拠点にするための実証研究を実施し、その先導的な実践を広く他の学校に普及させていくとともに、日本人学校・補習授業校が抱える課題解決を行っていくという趣旨のプロジェクトです。５つのプロジェクトがあり、今回紹介する事業はその内の一部で、特に「日本人学校における高度グローバル人材の基礎的資質形成のためのプログラム開発」が目的です。この分野においては香港日本人学校小学部グローバルクラスが先進的な取組を実施していますが、東京学芸大学附属大泉小学校も連携してプログラム開発を行っていきます。

なぜ、学芸大学附属大泉小学校と連携なのか

なぜ、香港日本人学校小学部グローバルクラスは本校（東京学芸大学附属大泉小学校）と連携することになったのか。それは香港日本人学校の取組と本校で現在取り組んでいる研究に多くの共通点があるからです。

香港日本人学校では、小学四年生から六年生までにグローバルクラスと呼ばれる少人数のクラスを特設し、英語のイマージョン教育を行っています。さらに、国際バカロレア（以下、IB）の教育プログラムも参考にしながら、独自教科として「グローバルスタディーズ」という新しい学習に取り組み、その単元を開発しています。

一方、本校では現在、文部科学省の研究開発学校指定を受け、グローバル社会に生きる力を育成するため、IBを参考にしながら新教科「探究科」の開発研究に着手しています。この「探究科」と「グローバルスタディーズ」のねらいが類似しているので、研究連携をしていくことになったのです。

IBに注目した理由

両校ともIBを参考に独自の教科を立ち上げています。なぜ、IBに注目したのでしょうか。

一つは、IBの理念に「多様な文化の理解と尊重の精神を通して、よりよい平和な世界を築くことに貢献する探究心、知識、思いやりに富んだ人材の育成」があり、これは本校のめざす児童像とほぼ同じであることです。おそらく香港日本人学校も同様と思われます。そしてもう一つの訳は、IBには国際教育の一貫したプログラム（小学校レベルに対するPYP〈Primary Years Programme〉、中学校レベルでのMYP〈Middle Years Programme〉、高校レベルでDP〈Diploma Programme〉）があることです。

文部科学省もIBに注目しています。その理由はおもに二つあります。一つは、IB教育のプログラムは知識暗記型学力や教え込み授業ではなく、アクティブラーニングと言われるような、グローバル型の学力を育成する授業が多く展開されることが期待できること。そしてもう一つが、IB認定校になると国際的に通用する大学入学資格（国際バカロレア資格）を与えられ、大学進学へのルートを確保できることです。

つまりDP認定校になると、卒業前の共通試験で一定のスコアをとれば、IBを認証している世界の大学に無試験で入学できる制度があるのです。日本でもこれに対応し、入学資格を与える大学も増えているようです。このことは、大学入学方法の選択肢が広がることとなり歓迎されていて、文部科学省は二〇二〇年までに全国でIB認定校等を二〇〇校以上に増やすことを目標として掲げています。DP認定をめざす高校は増加しており、この動きはしばらく継続すると思われます。

IB認定校へのハードル

IBの認定校にはすぐになれるのでしょうか。実は幾つものハードルがあります。まずは検討校になり、次に候補校になって、それからようやく認定校となります。この間、多くのチェックを受けます。カリキュラムはもちろんですが、組織運営や施設、教員研修など、多くの面で規定をクリアしないとなりません。また認定料を毎年支払うなど、資金面でも負担があります。

ここから小学校の話をします。PYP認定を受けている日本にある小学校は二十数校ありますが、その殆（ほとん）どはインターナショナルスクールです。いわゆる学習指導要領に則（のっと）った一条校では、二校だけが今年認定されたようですが、それしかありませ

ん。日本の学習指導要領とPYPとの共存は、容易ではないのです。このことから、日本の小学校が全てIB認定校になることは、めざすところではないと思われます。

教科横断型の学習の充実

しかしながら、PYPのよいところを教育の参考に取り入れることはできないものでしょうか。本校では、学習指導要領にIBのよさを取り入れた教育課程の研究開発にチャレンジしています。

PYPで本校が特に注目しているのが、「探究の単元」(UOI: Unit Of Inquiry)です。これは教科横断型学習で、六つのテーマをもとに構成され、グローバル型の能力を系統的に育成するようになっています。

学習指導要領でも、教科横断的な学習の重要性がいわれていますが、実際には実践しづらいところがあるのではないでしょうか。

なぜなら教科にはそれぞれ固有の学習系統があるため、教科を横断しようとしても、時期がずれたり、ふさわしい素材を見つけにくかったりして、継続的かつ系統的に積み重ねるには相当の教材研究と準備が必要だからです。

そこで本校では、思い切って社会科、理科、生活科、総合的な学習の時間を発展的に統合し、グローバル型の学力を育成する新教科「探究科」の研究開発をしています。この新教科「探究科」の理念が、香港日本人学校の「グローバルスタディーズ」と類似しているのです。

選ばれる日本人学校に……

これまでの日本人学校は、海外に赴任する保護者に同行する児童・生徒が、日本の教育を受けられるようにということで設立され、運営されてきました。ところが今の時代、日本人学校よりも現地校やインターナショナルスクールに通わせることを選択する家庭も増えています。「折角、海外に赴任するのだから、その文化に浸る経験をさせたい」「これを機会に語学力を身につけさせたい」という考えなどからです。赴任先が英語圏の地域では特にこの傾向が強いようです。

このようなことから「日本人学校離れ」という状況が起きていて、日本人学校の抱える課題の一つです。

一方、現地校・インターナショナルスクールに通わせた方は、同時に不安も抱えます。「日本人の独特の間、人との距離の取り方を身につけられないのではないか」「学習に遅れがでて日本に戻ったときに、ついて行けないのではないか」といったことです。日本の学習指導要領は、海外と比べて内容はトップレベル、高度で充実しています。また日本人独特の「コミュニケーションの間」のようなものは、やはり日本人学校の方が育成できるといえるでしょう。

このことから、積極的に日本人学校を選択する方もいらっしゃいます。

ここに日本人学校を「選ばれる学校」に改革するニーズがあります。日本人学校で期待されるような例えば英語力を育成できれば、より支持されるようになっていくでしょう。また海外にあるメリットを生かしてグローバル型の学力を育成することができれば、高度な教育力を持つ日本人学校のよさを活かしていけます。

グローバル型学力とグローバルスタディーズの可能性

日本人学校では、グローバル型学力を育成する学習開発が教育の重要な柱の一つになると考えます。

これからの社会は、グローバル化の進展、少子高齢化、AIの発展などで、予測不可能な時代が到来します。知識の暗記に頼った学力ではなく、課題について児童・生徒自らが主体的に探究し、違った考え方があっても仲間とともに力を合わせて協働し、新しいものを創造したり表現したりする力が求められていくのではないでしょうか。知識偏重のコンテンツベースから資質・能力重視のコンピテンシーベースへの教育変革が求められます。

すると、教科の枠内にとらわれた学習だけでは不十分。教科の垣根を取り払い、例えば現代的な課題の正解のない問題について学ぶ場合、①いろいろな立場を知り、②それぞれを尊重しつつ、③論理的思考と汎用的なスキルを活用し、④広い視野をもって考え、⑤自分なりの〝納得解〟を見いだして、⑥表現や行動する、といった学習展開が望ましいでしょう。このような学習の中で育成される力が、グローバル型の学力ではないかと私は考えます。

現在の学習指導要領でグローバル教育を行うには、総合的な学習の時間を活用することになります。もちろんどの教科でもグローバルな視点を入れて展開できますが、「教科」である以上、最後は教科固有の目標に結びつけなくてはなりません。グローバルな学力を正面から育成するには、教科枠を取り払った総合的な学習の時間が必要になるでしょう。

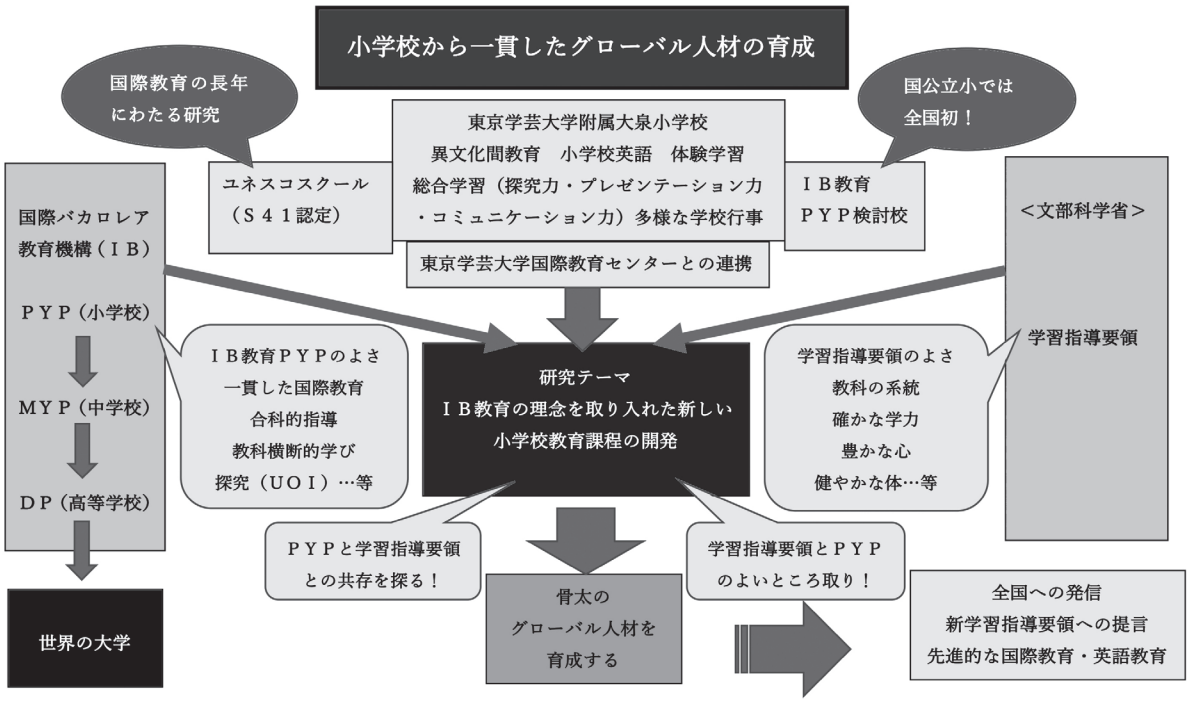
では海外の日本人学校において、

総合的な学習の時間にはどのような実践がなされているでしょうか。どこも時数的にも苦しく工夫して取り組んでいらっしゃることと思いますが、おそらく多くの日本人学校では、時数の一部を現地語学習とし、残りを現地理解教育として現地校との交流学習や、現地文化を理解する学習の時数として展開されていることと思います。

それは価値のあることですが、ややイベント的になってしまう点も課題としてよく聞かれます。本来なら、単に現地への知識理解に留まらず、グローバルな視野で世界との繋がりまで深まらせて考え、今後自分はどのように生きていくのか等、自分なりの〝納得解〟をつくる学習にしたいところもあるのではないでしょうか。それが高度グローバル人材育成に繋がります。

この深まりを生む部分は、日本国内にある学校では世界の文化に直接触れることが困難なので、机上の空論的な実践になってしまうことも少なくありません。しかし海外の日本人学校であれば、学校の中は「日本」ですが、一歩外に出ればそこは異国文化に溢れています。プラス面もマイナス面も実感をもって感じられると思います。より実感的に切実感をもって、グローバルな視野で思考していくことができるし、発信していくことができる。ここに海外にある日本人学校の取組ならではの強みがあると思われます。

日本の学校が、国内で一生懸命に取り組んでも、とうていかなわないところです。ここを強みにして今後、日本人学校が充実したカリキュラムをもち、積極的に選ばれる学校として発展できるよう願います。

香港日本人学校のグローバルスタディーズは可能性を秘めていると思います。先日、授業を参観して参りましたが、「紛争」をテーマにした学習を開発していました。「紛争が他人ごとではないこと」「自分たちが普段からできることは何か」といったことまで考えさせる授業でした。授業展開や単元構成の検討をさらに重ねていくことで、日本でよりも、「実感をもって学ぶことができる」と可能性を感じました。

本校の探究科もまだスタートしたばかりで、手探りの状態です。ともに研究連携しながら、香港日本人学校のグローバルスタディーズのような、グローバル型の学力を育成する学習を開発し、世界の日本人学校のモデルとなるよう取り組んで参りたいと考えています。